

Title	Fräulein と Männin : 造語に関する一考察
Author(s)	塩谷, 饒
Citation	ドイツ文学研究 (1967), 15: 23-41
Issue Date	1967-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/184909
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Fräulein と Männin

——造語に関する一考察——

塩 谷 饒

(1)

現代ドイツ語は英語やオランダ語に比べると分析的な性格が徹底せず、文語においては日常語で使われなくなった語法を保っている点が Nachteil だと評される。

しかしながら、一応音韻・語形の体系が整った言語の変化に大きな影響を与える新造語を生む手段となると、ドイツ語こそ西欧諸言語の中でこれを一番豊かに持つものと言われるのも事実である。オランダの英語学者 E. Kruisinga はドイツ語学の領域で Einführung in die deutsche Syntax という好著を発表しているが、その巻末でとくにこの問題に触れている。彼はそこで Stefan Zweig の Erasmus 論の一節を引き、ドイツ語の造語手段の多様性、その芸術家に対してもつ意義を示す例とした⁽¹⁾。しかもその例文を完全に翻訳できるオランダ人は少く、大ていはぴったりした翻訳というより単なるパラフレーズに終るだろうと述べている。そもそもオランダ語はドイツ語にもっとも近い同系言語であり、その造語の手段は劣らず豊富であると思われるのに、言語研究専門のオランダ人学者がドイツ語がこの点で優っているというのであるから、そのまま受け入れることができるであろう。

ドイツ語の新造語もときには品詞の転用によって行われることがある。

Studenten jazzten, kellnerten ……

これは学生がいわゆるアルバイトをしている姿の叙述である。

しかし、何といっても合成による造語が古くからある方法であり、また派生も有力な手段である。ver- による動詞の新造、-ung, -heit, -keit による抽象名詞の生産は止まるところを知らないと言えよう。

そこに生じた語はドイツ語を使う人々の思想傾向や、社会状況の一端をうかがわせるものが多いので十分研究者の興味をひくところと思われる。

ところで、いわゆる縮小名詞を作る派生辞 -chen / -lein や、女子を表わす名詞を作る派生辞 -in のようなものは、既存の名詞に付加して二次的な具体名詞を生ずる派生辞であるために記述文法での扱いは簡単である。

たとえば Schulz-Griesbach には次のような記載があるだけである。

-chen, -lein : bilden neutrale Diminutiva aus Nomen : -chen ist heute die gebräuchlichere Diminutivform (Umlaut) ; die Endungen -e und -en des Grundwortes fallen meist weg :

das Kindchen, das Fläschen, das Städchen, das Zwerglein, das Häschen, das Gärtchen

-in : (Plural : innen) : bildet feminine Nomen, die Berufe oder das Geschlecht bezeichnen ; bei Berufsbezeichnungen steht vorher meist das Suffix -er :

die Lehrerin, die Meisterin, die Münchnerin, die Sekretärin — die Löwin, die Bäarin, die Häsin

Duden もさらに詳しい説明とは言い切れず、-chen / -lein の地方的な分布と、-lein が格調高い言語で用いられることに触れている程度である。

Erben も十分ページをさいて論じてはいない。しかし、-chen / -lein の

Fräulein と Männin

撰択が基語の末尾子音によること、話者の故郷によることを記したほか、全体としての機能に触れている点が特異であろう。

すなわち、縮少派生辞は話者が emotional な関係に立つ生物・事物に付加するものであって、単に物理的に小さいものを表わすというより、zärtlich-gutmütig な、もしくは drohend-abschätzig な気持をこめた表現をとろうとしていると述べている。

また -in についてはこれを付加しない場合、付加する必要のない場合に触れ、短い行数でもやはり機能の検討に及んでいる。

私は現代ドイツ語における造語を記述して、これらの派生辞に触れる場合、なおこまかく考究すべき点があると思う。

-chen / -lein の撰択が話者の出身により、-lein は南ドイツを示すという Erben の記述は一応の正しさがあるが、南ドイツ (Oberdeutsch) 諸方言の縮少派生辞は -lein そのものでなく、地域によって -erl, -el, -le, -la, -li となることも知られている。これらの人たちが共通文語的な文を書くときどの程度に純粋な -lein を使うのかは問題であろう。一般には共通文語の散文では発音の都合による場合をのぞけば、—— Bächlein, Büchlein など—— -chen が用いられる。Schweitzer のように方言的には Oberdeutsch は属する人も、文章ではもっぱら -chen による造語を示しているが、果してすべての作家がそうであるかはこれまた一々調査して見る必要があらう。

韻文で好まれる -lein も現代の詩においてどのような扱いを受けているか、-chen との数量的な比率にとどまらず、その機能の差異についても考察する必要がある。

-in についてはそれほど問題がないようであるが、それでも Frau との合成語に対する関係 (Wäscherin : Wäschfrau)、女性の地位向上にとも

なう Professorin ⁽⁸⁾ のごとき新造語の認知などをめぐって考察すべき点がある。

(2)

-chen, -lein を付けた語の中には単なる縮少名詞に止らず、それ自体が独立の概念を担う語になり切ったものがあることは Mädchen, Fräulein, Zipperlein, Brötchen, Märchen などの例から明らかである。だから、Fräulein に対する愛称としては Fräuleinchen という新しい縮少形さえ生じ得るのであるが、一方においてはいつ頃から、いかなるいみの独立語として現われたか、語義の変遷史において扱うことも必要であろう。このような点について Luther 訳の創世記には問題となる例がある。

すなわち、旧約聖書の創世記には女のつくられた記事が二度にわたって出て居り、これを現行口語訳によって引用して見よう。

「神は自分のかたち⁹に人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」（1章27節）

「主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れて来られた。そのとき人は言った。

「これこそ、ついにわたしの骨の骨、
わたしの肉の肉。

男から取ったものだから、

これを女と名づけよう」。（2章22—23節）

これは創世記がいくつかの資料からなりたつためであり、上の記事に即して言えば、1章は祭司典（P）により、2章はヤハウエ資料（J）によっている。両者は編集の年代を異にするのみならず、そこに流れる思想のみ

ならず、文体・語彙の差が明白に認められる。

祭司典における「人」は創造という業のミラミッドの頂点をなすものであり、時間的には最後の——したがってもっとも重要な——被造物である。ただし、その男と女は組織的な記述を好む記者が、いわば生物学的な分類を行ったと評せられる淡々たる表現である。

しかるに、ヤハウエ資料ではいわば創造の中心におかれた人が、これにふさわしい助け手として女を与えられたことになって居り、原語では「is からとったから išša と名づける」と音の上からも男女両語に関連性を持たせている。これらの区別は日本語ではとうてい表現できないが、Luther は原語のニュアンスをドイツ語の派生辞を用いて巧みに訳し出している。

祭 司 典 : vnd er schuff sie eyn **menlin** und **frewlin**.

ヤハウエ資料 : man wird sie **mennin** heiszen, darumb das sie vom manne genomen ist.

祭司典の **frewlin**、ヤハウエ資料の **mennin** はそれぞれ現在の Fräulein, Männin に当る形であるが、ともに女の訳語として使用され、今日示す意味とは異っていることに注目すべきである。

すなわち、**frewlin** は形の上から言えば mhd. の **frowelin** の音変化したものであるが、意味は中世文学においてふつう示される「身分ある人の息女」ではなく、男と対にして造られた女である。旧約学者 H. Gunkel は創世記注解で als Männchen und Weibchen と説明して居り、ラテン語訳 *Vulgata* をはじめとする諸訳からも原語は生物学的の雄雌ともとれる意味があることが察せられるが、Luther はこれを考慮したものと思われる。Fräulein そのものは18世紀まで身分ある人の娘を表わすのがふつうであったから、Luther の訳語は語義の歴史において連続を破ったものとして顧みられなければならない。

一方 Männin はどうかと言えば、現在では男のような女、Amazone の意味に使われており、Luther 以前も男との創造の関係を示す語として使用されることはまずなかったであろう。

しかしヤハウエ資料に記されている iš — išša のなぞりとして大へん都合よい形であることは、Gunkel の注解書のみならず、Menge 訳や Züricherbibel でも現在の意味とは異った Männin が用いられている点で察せられよう。

これは他のゲルマン語の翻訳にも見られるのであって創世記では何れも Männin にあたる形を示している。

そして現代語では何れもドイツ語同様語義が変わり、日常語ではほとんど使用されなくなっている。すでに Kluge が説明しているように、Luther 訳がドイツ語以外のゲルマン語の聖書翻訳にあたって大いに参考されたことを顧みると、この場合にもたしかに影響があったと察せられよう。

オランダ訳：Men zal haar **manninne** heeten, om-dat zij uit den man genomen is.

フリジア訳：Dizze sil **mannine** neamd wurde, hwant fan'e man is hja nommen.

スウェーデン訳：Hon skall heta **maninna**, ty av man är hon tagen.

ノルウェー訳：Hun skal kalles **mannine**, for av mannen er hun tatt.

さてそれでは次に縮少派生辞と -in が全体として Luther 独語の中でどのような現れ方をしているのか、次にそれを検討して見よう。

(3)

縮少派生辞は Luther の書翰や Tischreden などにたまに -chen 系統のもの⁽⁴⁾があらわれるほかはほとんど -lein 系統の形である。これは Mhd. から17世紀の半ばに至る Schriftsprache に見られる傾向であり、その限りにおいてはいわば歴史の流れに沿っている。しかし、前節の frewlin でも分るように代表的な形は重母音化しない -lin である。Luther は1519年頃までは Oberdeutsch の -lein を使っていたが、文筆活動が盛になった1520年頃からは -lin を主とするようになった。これは古い文語の形によったものとも言えるが、Luther の出身地である Mitteldentsch で行われている形であり、文語での使用が抵抗なくできたのであろう。

なおはじめのうちは方言的な縮少派生辞 -le を用いることもあったが、後には(1528年頃からあとは)これも用いなくなった。

たとえば1522年の初版新約聖書には Kindlein に対するものとして、kindlin が28回現れ、kindle が1回だけ見られる。(Luk. 18, 15) しかし後の版ではこれも -lin に代えられた。

1522年 : Sie brachten auch iunge **kindle** zu ihm.

1546年 : Sie brachten auch junge **Kindlin** zu jm.

しかし韻文では、リズムと脚韻との関係から一つの詩の中で -lein が何回も用いられることがある。

たとえばクリスマスの Kinderlied „Vom himel hoch da kom ich her” は1535年に発表されたものであるが、-lin が7回に対し -lein は3回現れている。

kindlin, kindelin, krippelin, Jhesulin, (2回), windelin, bettelin —

kindelein, windelein, wigelein

次の Strophe における kindelein は4脚を整えるため、その e は Senkung, -lein は Hebung を保つための形である。

Euch ist ein **kindlin** heut geborn
Von einer jungfraw auserkorn,
Ein **kindelein** so zart und fein,
Das sol ewr freund und wonne sein.

また次の -lein は脚韻をそろえるためであろう。

Der sammet und die seiden dein,
Das ist grob hew und **windelein**

このように子どもの歌に縮少名詞が出て来るのは当然であろう。ことに注目すべきは Jesus の縮少形である。これはクリスマスの歌でなければ絶対に現れない形であるが、そこには新生児たる救世主に対する親しみがあふれている。

Wes ist das schöne **kindelin** ?

Es ist das liebe **Jhesulin**.

.....

Ach, mein hertzliebtes **Jhesulin**,

Mach dir ein rein, sanfft **bettelin**,

Luther は若いものたちの教育にイソップ物語りの価値を認め、自ら14編を翻案して1530年に発表した。その中には実際に小さいもの、可愛いも

Fräulein と Männin

のが -lin を付けて登場してくる。

その第1編は次のようである。

Vom Han und Perlen

Ein Han scharret auff der Misten und fand eine köstliche Perlen. Als er dieselbigen im Kot so ligen sahe, sprach er: Sihe du feines **Dinglin**, ligstu hie jemerlich: Wenn dich ein Kauffmann fünde, der würde dein fro, und du würdest zu grossen Ehren komen. Aber du bist Mir und Ich dir kein nütze, Ich neme ein **Körnlin** oder **Würmlin** und lies eim alle Perlen. Magst bleiben, wie du ligst.

そのほか Büchlin, Lemlin, Heuslin, Hündlin, Feldmeuslin, Fisschlin が認められる。

翻案の前には独自のイソップ論を展開しているが、その一番はじめに Dis Buch von den Fabeln oder Merlin とある。Merlin は今日の Märchen である。その縮少でないものとの語 „mehr“ は上述のクリスマスの歌に見られる。そこではおとづれ、知らせの意味であるが、現在日常に使われる語ではない。

それはともかく Merlin は新約ルカ伝 (24, 11) では

Vnd es dauchte sie jre wort eben als werens **Merlin**.

とあり、これは原語 *λόπος* (=Geschwätz, 邦訳「愚かな話」) の訳語として用いられている。ここでは Erben のいう abschätzig なニュアンスが含まれていると言えよう。

聖書では物語り風の記事の占めるスペースも多く、そこには物理的に小さいものが現われることがあるから縮少名詞もよく出てくる。それらはかならずしも原語の縮少名詞の再現とは限らない。

それらを今日の形で分類して見ると次のようになる、

人 間 : Kindlein, Knäblein, Mägdlein, Töchterlein, Männlein,
Weiblein, Leutlein.

動 物 ; Böcklein, Fischlein, Hündlein, Käuzlein, Lämmlein, Milch-
lämmlein, Schäflein, Vögelein.

植 物 : Sträuchlein.

天 然 : Bächlein, Brunnlein, Lüftlein, Wässerlein.

器 物 : Bettlein, Bündlein, Büchlein, Kettlein, Krüglein, Lichtlein,
Schifflein, Täflein

場 所 : Häuslein, Kämmerlein, Vorhöflein, Würzgärtlein, Mäuerlein.

その他 : Brosamlein, Fünklein, Häuflein, Häutlein Mütlein, Stäublein,
Stücklein, Stündlein Wörtlein.

このうち語形で注目すべきは Mägdlein である。これは現在の Mädchen の意味で使われているが、新約初版 (1522) には 5 回 meydlin として現われ、マルコ伝 4, 14 では meydle となっている。これは最後の版 (1546) ではみな Meidlin に統一された。

意味の上から特異なのは Leutlein (使徒行伝 28, 2・4) である。これは 1522 年の版では leuttlin, 46 年版では Leutlin として現われ、むしろ Leute の縮小形である。原語は Βάρβαροι であるため、Züricherbibel では一応 die Barbaren と訳した上、それは理解できぬ言語を話す人々だという注があり、Menge は die fremdsprachigen Eingeborenen としている。しかし前後の関係からマルタ島の住民がパウロ一行になみなみならぬ親切を示したことが分るので、Luther が親しみをこめた語として Leutlein を⁽⁵⁾ 択んだと察せられる。

An den christlichen Adel deutscher Nation の中には ein **heufflin** (=Häufflein) fromer Christen leyen という表現がある。これは現実に小集団を示すとともに著書の愛着・憐憫の情がこめられた縮少名詞ともとれる。

もっとも身近なもの——すなわち妻——も縮少形として表わされるが、Vom ehelichen Leben の meyn **weyblen** Greten は -len という形であることと、日記・書簡・物語りとといった文体でなく論文の中で用いられたことが注目に値する。

同じ単語でも感情が逆の方向に動いて軽蔑の意味で用いられることがある。すなわち、テモテ後書3, 6の *γυναικαρία* で邦訳には「愚かな女たち」とあるが Luther はやはり Weiblin (1546) と訳している。

軽蔑の方向の極端な例が *hürlein* (=Hürlein<Hure) であろう。1520年に発表された Von der Freiheit eines Christenmenschen の12節ではキリストの花嫁にたとえられた人間の現状が貧しく、軽蔑すべき性悪の娼婦 (=das arm, vorbrachte, böße hürlein) として表わされている。

人物ではなくても、軽視すべき者に属するが故に縮少形となった例もある。

Der Bapst hat ein edlis **fundlin**. (An den den christlichen Adel)

さて、上の聖書における -lein の分類で、器物に関する頃を見ると、Bettlein はルカ (5, 19・24) にのみあり、ほかは Bett となっているが、これは Luther が原語のニュアンスを訳し分けた例である。すなわち、Bettlein はギリシヤ語でも *κλίνη* の縮少形 *κλινίδιον* にあてた語である。

これに対し、Schiff—Schifflein は *πλοῖον*—*πλοιάριον* といった並行関係を示さず、*πλοῖον* が両方の語を示している。

もとの名詞自体が物理的に小さい概念をもつときの縮少形は明らかな強

調と認められるものである。

aber doch essen die **hundlin** von den **brosamlin**. (1522, Matth. 15, 27)

少量の程度がきわまれば、価値の低さもきわまる比喻として使われる。

Siehe, die Inseln sind wie ein **Stäublein**, (Jes. 40, 15)

stucklin (=Stücklein) のように少量を示す縮少名詞がほとんど不定代名詞としての働きを示すことがある。

und der **Stucklin** viel mehr

unnd haben furwar uns solch **stucklin** aus Rom bracht. (An den christlichen Adel)

単語のふくむ概念が視覚的な大いさを持つ具体的な名詞でない場合でも、物理的な単位によって測定できる場合には、その小さいことを示すために縮少形にすることがあり得る。上の分類では **Stündlein** がこれに当てあろう。

これに対してやや抽象的ではあるが、視覚に訴えれば長短が分り、また聴覚を刺戟すれば時間において経過する **Wort** のごときものも、さらに価値の高下も含めて縮少形を示すことがある。

An den christlichen Adel に出て来る das bloß schalckhafftig **wortlin** „Bapsts gesind“ は事実において価値の低いことをもふくませた表現であろうし、また同論文にある ein **wortlin** „Commenden“ も一つの短いラテン語であるというに止らず、その価値が問題にされていることは、それに続く **Luther** の説明によっても明らかである。

ことに **wortlin** の代りに外来語にもとづく **gloßlin** を用いた場合、言葉の無内容、不真実を表わす軽蔑的な態度が十分読みとれる。

Fräulein と Männin

..... und hat nu alßo ein **gloßlin** funden, das er in eygener person liegen (=lügen), triegen (=betrügen) und yderman effen (öffnen) und narren mag

これに対して、形そのものは小さくとも最大の内容と、その効果を意識して **Wörtlein** を使っているのが、有名な詩 „ein' feste Burg“ である。

.....

Der Fürst dieser welt,
wie saur er sich stelt,
thut er uns doch nicht,
das macht: er ist gericht,
Ein **wörtlein** kan jn fellen.

この **Wörtlein** は Luther が絶大な信頼をよせているキリストの発する言であることが、前の **Strophe** から明かである。Luther は福音書においてキリストがサタンに対して発した短い、しかも効果的な発言を顧みていると察せられる。

このように多岐にわたる縮少接尾辞の使用は、彼の文体が非情の表現にもとづくものでなく、逆に情感に富むことを示すに十分な例となっている。

(4)

次に **-in** について見ると Franke は以下の語例をあげている。

*blindin (=blinde Frau), breckin (=weiblicher Bracke), gesellin,
*gleubiginne, harrerynne, Lesterinne, Mennin, *Nehestin, seugerin.

-in による女性名詞の造語は Luther とその時代の人々の方が現在より

さかんであると述べている。上例で*をつけた語は現在では純然たる形容詞変化ですませているものである。

語例に関しては、Franke が Alphabet 順に並べたところに尽きるものでなく、聖書の中でも次のような語がある。

Buhlerin, Dienerin, Ehebrecherin, Einwohnerin, Enkelin, Eselin, Feindin, Freundin, Fürstin, Gehilfin, Gespielin, Herrin, Hüterin, Jüdin, Jüngerin, Kanaanitin, Karmelitin, Kriegerin, Königin, Lästlerin, Türhüterin, Männin, Männermörderin, Nachbarin, Närrin, Predigerin, Prophetin, Purpurkrämerin, Richterin, Säugerin, Schwägerin, Sünderin, Zauberin

以上の例からやはり動詞より派生した -er に終る男性名詞にもとづく語が多いことが分る。ただし、聖書の中に基語であるべき男性名詞が出ていないものもある。すなわち、Männermörderin (トビト 3, 1) のような語はその意味からして男性形はあり得ないものであるが、Purpurkrämerin という仕事も特殊であるから、男性形が聖書のほかのところに現われて来ないのもあやしむには足りない。

Vnd ein gottfürchtig Weib mit namen Lydia eine **Purpurkremerin**, aus der stad der Thyatirer, hörte zu

(ところが、テアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。——使徒行伝16, 14)

またロマ書 (13, 4) にたった一回でて来る Dienerin は具体的な女性をさすのではなく、Obrigkeit の比喩として用いられている。

Lästerin, Zauberin は語幹部に -er- の省略があり、もとの男性名詞は Lästterer, Zauberer である。

以上のほかに注目すべき語例をあげれば、まず *An den christlichen Adel* に見られる *eine spyinnerin und netterynne* である。これは形の上から言っても *-in* と *-ynne* がとなりあって見られる点でも引用に値するが、*netterynne* はもはや使用されず *Näherin* に置きかえられ、語史上考察の対象になる語である。加えて両者はもともになる男性形をまず予想しない。

次には *Vom ehelichen Leben* に出てくる一連の語である。

Die funfte ist unglawbe, nemlich das ich keyne Turckyn, Jüdyn odder ketzeryn nemen mag.

これは当時、信仰の正統性が具体的に問題となるときに、かならずひきあいに出されたトルコ人、ユダヤ人および異端者の女性名詞である。

上に引用した文のすぐあとに男性形がでてきている。

Man findt wol Christen, die erger sind ym unglawben ynnewendig denn keyn Jude, Heyde odder Turcke odder ketzer.

-in による女性名詞化が動物に及んだ例としては *Eselin, Hündin* が挙げられる。

vnd balde werdet jr eine Eselin finden angebundnen. (マタイ, 23, 2)

Ein schwangere Hündin bat mit demütigen Worten einen Hund, das er jr wolt sein Heuslin gönnen (Etlliche Fabeln aus Esopo)

(5)

縮少派生辞、*-in* による造語を問題とするとき、語史上 *mhd.* と *Lutherdeutsch* の中間に位する *Der Ackermann aus Böhmen* も興味ある事実を示しているといえる。

まず縮少派生辞について見ると、その造語は少なく、いずれも重母音化

を示し *-lein* である。

eugelein, mundlein, schretlein (=Schrätlein: Waldgeist), Wenglein
(=Wänglein<Wange)

一方 *-in* による女性名詞はこの量的に大きいとは言えない作品の中で21を数えている。そもそも *-er* を示す男性名詞が数多く、実に52に及んでいるのであるが、実はもともになる男性名詞とともに現われる *-in* はわづかに *ausrichter*, *entwerfer*, *meister*, *trauren wender*, *wachter* だけである。このことはかえて *-in* による造語がはなはだ旺盛であることを示している。しかも、その大部分が現実の職業をあらわすものでなく比喩的に用いられている点はきわめて注目に値する。すなわち、26章においては死 (*tod*) は人に向かってあらゆる学問技術が無益であることを主張しているが、それらの性質を *-in* による女性名詞をもって言表わしているのである。

Logica(=Logik), der warheit und unwarheit fursichtige **entscheiderin**

Geometria(=Geometorie), der erden **bruferin** (=Prüferin), **schetzerin** und **messerin**

Arismetria (=Arithmetik), der zale behende **ausrichter**

Artronomia, des gestirnes **meisterin**

Musica, des gesanges und der stimme geordente **hantreicherin** (=Gehilfin)

Geomancia auf erden allerlei frag behende **verantworterin** (=die geschickte Beantwörterin vielerlei Fragen)

Pyromancia, sleunigs und warhaftigs warsagenus **veurwurkerin**(die

behende und wahrhaftige wahrsagerin aus dem Feuer

Ydromancia, in wassers gewurk der zukunfftigkeit **entwerferin**

Astrologia, mit oberlendischer sachen ursachen irdischer laufes **auslegerin**

Ciromancia (=Chiromantie), nach der hende und nach des teners kreißen hubsche **warsagerin**

Nigromancia, der geist gewaltige **twingerin** (=der Geister gewaltige Besorngerin)

Ornomancia mit birkhene dermen **luplerinn** (=aus Auerhennen-Gedärme Seherin)

これらの語例によって判断すると作者は高度の教養を身につけた人である。そして自由に作られた女性名詞はラテン語の女性形として示された学問技術にもとづくものであろうが、Zweig の造語を絶讃したオランダ人学者は、これにも必ず眼を見はったことと察せられる。

上例に対し、次の文中の **-in** は Ackermann が亡妻をしのんで述べた言である。そこには比喩的な言いまわしも認められるが、具体的な女性を示していることは事実である。

Fur alles we (=Weh) und ungemach mein heilßsame **erzetin**, gotes **dienerin**, meins willen **pflegerin**, mein leibes **auswarterin**, meiner und irer eren teglich und nechtiglich **wachterin** was sie unverdrossen.

そのほか別のところで妻に関し **trauerwenderin** という表現があり、さらに単独で **zauberin**, **martyrerin** があらわれている。

(6)

以上縮少派生辞と in について Luther, Ackermann を例として考察したが、それは単に語法というにとどまらず、その派生語のあらわれる文の性格、あるいは文体、これらを即興的に用いた作者の意図などを顧みる必要があることが明らかであろう。

なお Männin, Fräulein のように語の意義の変遷あるいは語野の問題と切り離して考えられない派生語も多く存在することは、簡単に見える派生辞の扱いが事実において複雑であり、体系的ならぬ記述で満足しなければならないことを教えている。

注

- (1) E. Kruisinga: Einführung in die deutsche Syntax (1935, Groningen—Batavia) Kap. XX Wortschatz und Wortbildung S. 251-252.

なお P. Priebsch and W. E. Collinson: The German Language (1958, Londondn) p. 439 にも簡単にドイツ語造語法の特徴が簡単に記述されている。この書物の Chapter III Word-Formation (p. 231-263) ではドイツ語の造語法が英語と比較して扱われている。

L. R. Palmer は Introduction to modern linguistic (1936, London) の Chapter IX Language and Thought (p. 178) で、ドイツ語が抽象的な思想を担う語を作る手段に優れていることを論じている。„It is well known that the level of intellectual education among the German people is far higher than in England.“ と述べ、それが上述の点にあることを主張している。現在の時点でそれが妥当しているかどうかは別として英国人学者の言としては注目に値すると言えよう。

ドイツ語の造語法を オランダ語と 対比しながら説明しているのは J. Van Dam である。彼はその著 Handbuch der Deutschen Sprache (Groningen, 1958) の 2 巻, D. Wortbildungslehre 319-450 で非常に詳しく述べている。

Fräulein と Männin

ドイツ語の造語はかならずしも「賞讃されている」とは限らない。国際的な Telefon に統一せず重苦しい Fernsprecher を使うことがヨーロッパ的な性格を担うドイツ人として得策であるかどうかという批判の声もある。(たとえば A. Meillet の *Les langues dans l'Europe nouvelle*, Payot, Paris 1928 の chapitre XXI De L'emploi des grandes langues de civilisation comme langue secondes p. 256-258 を参照)

- (2) たとえば、ふつうの小鳥は Vögelchen という形を使っている。(Zwischen Wasser und Urwald)

やはり元来は Oberdeutsch に育った R. Schinzinger は共通語の Mädchen に対して日常では Mädcl を使う方が gemütlich であろうが、Erinnerung において „Mädclchen“ と書いている。これは文章語では -chen をつける意識が働いたものであろう。

-chen が -lein を圧して文章語でもっぱら使われるようになったのは17世紀以後のことである。歴史的な文法(たとえば Paul の *Deutsche Grammatik* のような)では造語論の中でわりあいに詳しく取扱っているが、当然のことながらそれだけでは現代語における機能は十分察せられない。

- (3) Professorin として演説したとか、講義したというような記事が新聞にも時々出ているが、称号として用いられていないのが現状である。
- (4) Franke (*Grundzüge der Schriftsprache Luthers II Wortlehre § 2*) は、わずかに Engelgen, Canonichen=kleiner Kanon, Trömichen=Trömmling, Kaninchen, Sönichehn, Gefindchen, Hensichen, Lenichen, stübigen を確実な Belege としてあげているだけである。

私の気付いたものに Martinchen (*Tischreden 1559*) がある。

- (5) 私は中部ドイツ語地域の Marburg において小学校を定期的におとづれた経験があるが、そこの教師は私を Professorchen と呼んだ。これは愛称であったが、彼らに比し私が小づくりであると判断されたためでもある。